統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
42

日本における統計学の発展

第 42 巻

話し手　山田　勇

聞き手　砂田吉一

統計数理研究所図書室

1982年2月17日（水）

亜細亜大学にて

10/12
26030

26030

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

山田　僕は、戦前からずっとやっていた数名の中の1人なんです。戦後は、統計学会を始めるまで、僕がやっていたんです。ですから、その事情は、ほかの人にはわかってないと思う。重点を戦前、といっても戦争に入る直前から戦時中、それから統計学会がもう一度復活する、それについての事情。少しそういうような話をしたらどうか。これは、ほかの人は、あまり知らないと思うから、それを中心にしてやりたい。そういうことで、資料をずっと捜してみたんです。家を家捜ししたんだ。(笑)

森田先生から、日本統計学会の開設について話があったと思うけれども、その中に載っておったか、要するに日本統計学会が昭和6年にできた。そのときの問題、どうしてそういうものができたかということについて、「日本統計学会要覧」というのが出ておって、これにだいぶ載っているんです。こういうことを一応お話ししても、あまり意味がないと思うが、資料は砂田さんに預けておきます。

「日本統計学会会則」というのが、最初にできたんです。(資料1)重要な点といっては、「本会に入会せんとする者は統計学に興味を有する者にして会員2名以上の推薦に依り評議員会の承認を経ることを要す」。これはずっと長らくこの方式で続けてきて、会員2名以上の推薦があればよろしいということでやってきたわけだけれども、戦後、統計数理へ行ってから少し変わってきて、学生会員だとか何かもできたわけですね。そのときには、マスターを出た者はいいとか、それは後の問題になる。初めは、だれでもいいから会員2名以上の推薦があればいい

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

んです。その当時、大体2名だったんです。2名の会員の推薦があれば、評議員会の議を経て、全部会員になることができる。こういうことが、その当時ありました。

その当時といまとちょっと違うところは、日本統計学会の事業というのがあるわけですけれども、それは総会を開くこと、研究報告会を開くこと。もう1つ、懇親会というのがあるんです。会員相互の懇親をも同時に目的とするのが、統計研究会である、こうなっておったわけです。それが、ある時期に絶えてしまったこともあったと思う。いまは懇親会は……。

砂田　ずっと続いていますね。

山田　そういうのがこの会の目的であるということで、昭和11年の1月末現在で会員数が152名となっているんです。会員のほとんど半数は、もう亡くなっている。

「日本統計学会大会の沿革」(資料2)というのがあるんです。

砂田　これは全く古色蒼然として……。

山田　「全国大会は毎年3日間に亘り総会、部会及び見学遊覧等をなすを例とせり」。遊覧をやるんだ。

第1回全国大会が創立総会を兼ねるというんで、昭和6年5月、京都帝国大学経済学部でこれを行った。第6回は昭和11年、東京、内閣統計局において行ったというのがあります。

戦前の幹事が、森田優三さんとなっているんです。森田さんが一切合財やっていたわけだ。そのときの顧問が中山伊知郎先生、有沢広巳、杉本栄一先生、この3人で、森田さんを中心にして、顧問3人でいろいろ話をして、森田さんがその意思を受けて、いろいろな会議の企画を

25字×26行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

立てるということだったんです。

砂田　そうすると、理学という関係より、むしろ全く社会科学、経済学の方が……。

山田　社会ばかり。理学関係は全然いません。いたのは、たとえば北川敏男さんは古いですよ。この「要覧」は昭和11年の名簿で（資料3）、ほとんど社会統計関係ばかりです。数理統計の人は、そこへ入らせてもらったという形なんだ。これが統計学会の最初であって、特に数理統計を中心としてやられたのは、小倉金之助さん。小倉先生は亡くなったけれども、小倉先生はほとんど報告がなかった。それから亀田豊治朗先生は簡易保険局で、非常に有名な先生です。これも数学者。

それから後藤憲章さんは古いです。満鉄の総務部にいた。山口高等商業の近藤鷲（あつし）さんというのは、やっぱり数理統計を中心にしてやった先生です。数学関係は大体東大とか京都の理学部を出た先生なんです。

この名簿には、昔の有名な経済学者は、ほとんど全部入っているんです。

北條（時重）さんは、数学なんだ。高松高等商業。森数樹さんも数学なんだ。あまり数学やらなかったかな。それから安川（数太郎）さんが数学で、本を書いています。

北川君はまだ後だな。最初のときは、彼はまだ若くて入っていない。

いま残っている「要覧」で、大体それまでの状況がわかる。昭和11年1月末日現在、会員数が152名で、実際に会議があって出てくる人は30名内外です。あとは名目上の人で、会費を払ったわけだ。その当時、会費が4円

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

だから、みんな会費だけ払って学会に入っておるということですね。

砂田　4円というと、どうなんですか。いまの5000円以上でしょう。

山田　そのときの月給が、大学の先生で平均して200円ぐらいもらっているね。200円の4円だから、会費が本当にわずかなものですよ。要するに負担が非常に軽いので、皆さん、入られた。

ほかに、日本経済学会というのは、その当時は閉鎖制になっておって、会員数が全体で20数名よりいないときだ。したがって、学会発表をやろうと思っても、もっと広い分野に属する人はなれない。日本経済学会というのは、大学及び専門学校において、経済原論を担当をする者をもって構成する。そういうようになっている。僕なんかも、安井君も、家本も入れない。それで安井君が先に入って、家本、僕が同時に入ったのかな。結局、入らないんだ。

砂田　入らないというんですか、入れないというんですか。

山田　たしか安井君も入れなかった。そういうことで、非常に厳格だった。人数をふやすと、会員の親睦がなくなるということがあったんでしょう。経済原論以外の人がそこへ入るということは、やはり困るんだという話があって、非常に閉鎖制だったんです。そのときは、一昨年亡くなった神戸の坂本弥三郎先生が大体幹事で、非常に厳格にやった人なんです。一切ダメだということで……。

砂田　それに対する何か……。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

山田　それに対して、もう少しオープンに会員2名の推薦があればできるということで、ここで経済学その他の発表をやったんです。だから、戦前は、統計学というよりは、もう少し社会経済一般についての報告が非常に多かった。したがって、そういうことがあったものだから、数学者は念頭になかったわけだ。数学者は統計に関係ある人はお入りくださいということであったから、昭和11年でも、数学者はほんの数人なんです。

砂田　それを見ましても、数学者といっても、社会科学に興味のある方のようでございますね。数学そのものということじゃ……。

山田　数学そのものをやっている人、たとえば増山（元三郎）君とか、全然入る意思もなかった。それから河田龍夫、これも統計数理をやっておった。その当時は生命保険にいたから、入っていないというようなことで、社会経済統計関係者が大部分です。

それが戦後、少しずつ変わって、いまは数学者が中心になるようになったというのは、1つには、統計学の性格が変わってきたわけだ。特にアメリカの統計は、確率も含んで数学の1つになっているという関係が、数学者の方からいろいろいわれた。したがって、統計学会は、そういう統計数学をやるところだというように、一般的な傾向が変わってきたということもあると同時に、統計学会から社会経済関係者がだんだんなくなってきたというのは、統計学会における報告が数学を中心にしてやってきたから、社会経済関係は興味がないということで、どんどんドロップした。これが最近までの傾向なんです。しかし、初めはそうでないということが、それでわかっ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

たでしょう。

これが創立のときで、僕は第7回のとき、これは名古屋高等商業でやったんです。

砂田　そのときは、大学がなかったんですね。

山田　僕がそこを出ているわけだけれども、そのときに「じゃ、君、入らないか」ということで、そこで会員になった。それから毎回研究報告をやれ、やれって、やらされた。その当時は、若いやつが入ったらやれという話で、年寄り連中はじっと聞いている。いじめることはしなかったな。

第7回、第10回、第11回の記録と、戦時中の記録、これが記録として僕の手元にあるやつです。

その第7回統計学会について。(資料4) その当時の名古屋高等商業で開催した。そのときの出席者は32名、第7回は昭和12年4月5日から4月7日まで。そのときの行事及び行う事業は、総会、研究報告会、懇親会、必ず3本立てになっています。懇親会というと、日本ライン、名古屋城、徳川美術館、そういうところを見学したんです。そうすると、これはみんな参加したんだ。いまみたいにほとんど参加しないんじゃなくて、全部が参加した。したがって、会員の親睦が非常に緊密になっていた。僕なんかは入ったばかりで、まだ20何歳だから、諸先生について回った。そういうお互いの親睦が、非常に綿密に行われた。会員が少ないから。いまみたいに多いと、懇親会をやったってほとんど全部は出ない。ごく一部の者だということになってしまうけれども、その当時は30名内外で、大体お常連が決まっちゃっている。150何名会員があるけれども、この中で出席者は30名内外、これは

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

毎回出てくる。したがって、懇親会をやると、そのときにいろいろな演技物が出たり……。

砂田　余興をやるんですか。

山田　余興をやったりしたものですよ。

1つは、その当時は、記念講演というのを必ず織り込んだんです。それはその地方のラジオ――テレビはないから、名古屋放送局から、たとえばその当時は彦根にいた岡崎文規さんという人が、ラジオ放送をやった。毎回その開催地で、会員がラジオ放送をやる、あるいは一般講演をやって、一般の市民を統計に親しませる。そういうことが、やっぱり仕事の1つになっていました。

だから、日本統計学会会員というのは、非常な誇りを持っていた。日本経済学会には入れないから――それは、入っている人があるんですけれども、大部分の者は、僕も入っていない。そうすると、結局、統計学会の会員であるということが、学界における1つの非常に大きな誇りだった。というのは、ほかの社会科学は、政策学会はずっと後だし、みんなずっと後です。昭和6年にできたというのは、統計学会がほとんど最初だろう。

統計学会ができたというのは、森田さんの本（『統計遍歴私記』）に書いてあるが、昭和3年にボルトキヴィッチが来たんだ。それを記念して統計学の学会をつくったらどうかというのが最初で、森田さんはいつも中山さんを兄貴と思っていたから、それを中山さんに相談した。中山さんは東大の方と連絡をとったということで、統計学会ができたわけです。だから、最初はやっぱり中山、森田というところ、それから有沢、大内、そんなところが中心になって、学会ができたはずです。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

砂田　京都の方も……。

山田　京都は財部さん。特に統計学会に関係があるのは、汐見三郎。大体財政学関係の人ですね。汐見さんは、統計学会に非常に熱心だった。それから神戸の方でいえば、水谷一雄が大体中心になってやっていた。それからあと、坂本弥三郎なんかという人もいたけれども、神戸は、水谷さんが非常に大きな力を持っておった。家本は水谷さんの弟子だから、後で入ったんです。そんなようなのが最初の事情です。

第7回（昭和12年）のときの内容をいいますと、出席者が全部で32名、その報告が19あるわけです。その中で、9編が社会経済統計に関するもの、人口統計が6、数理統計が5編。こういうことで、数理統計は、統計数理に関心のある人だけが報告をした。大部分は社会統計、人口統計。人口は、いまでも統計学会で重要な位置を占めておるわけです。第7回日本統計学会大会日程、研究報告を見れば、どんなことをいっておったかというのがわかります。

次に記録があったのは、第10回です。大阪商科大学及び日本生命本社で行うというので、昭和15年4月4～6日、3日間にわたって行われる。この記録は、その当時は全部森田さんが、幹事としてとったんです。非常に詳しく載っています。（資料5）

このときの研究報告は全部で20編あって、社会経済関係が13編、大部分がそうだ。人口が5編、数理が2つでして、非常に少ない。このときの特徴は、これは昭和15年ですから、戦争ですね。したがって、戦時色が非常に濃いものになっています。これは共同研究という形でや

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ったわけですが、これは「戦争と統計」というテーマで、それぞれ研究報告をすることになっておったんです。その関係は、社会経済統計13編の中で全部で9編あるんです。数理関係は、あまり関係がなかった。しかし、内容を見ると、戦争になったから、戦争に関して何かやらなきゃ世間に対して悪いだろうということで、「戦争」という字はくっつけてあるけれども、内容を見ると、戦争でなくたって何だっていいようなことになっているんですよ。たとえば「戦時における人口統計」とか、そんなのは普通の人口統計で結構だし、「戦時工業生産統計」、そんなものは戦時でなくても何でもいいわけだ。というようなわけで、その時局柄、「戦争と統計」という特集をやったわけです。これを共同研究として発表したのが昭和15年、戦争直前の年なんです。

それから、第11回。

砂田　古いですね。

山田　しようがないから、2日間かかって書庫を全部ひっくり返したわけよ。鼻が真っ黒になったよ。(笑)

砂田　どうも申しわけないです。

山田　僕でなければわからないやつがあるから、やっぱりこれはぜひやっておかなければいけない。ワイフにしかられたよ、鼻を真っ黒けにして、手伝えっていって。クズ屋に持っていけば2束3文だ。ところが、そういうのをまた拾い集めるのがいるんだよ。それで、この当時はこういうことをやっていたと論文書くやつがいるんだ。そんなの学術論文になりゃしない。(笑) 古書なんです。

第11回ですが、昭和16年4月4日から4月6日まで3日間、慶応大学でやりました。(資料6) そのときも、総

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

会、研究報告会（17報告）、懇親会、この3つをやったわけで、出席者数は全部で50名、だいぶふえたな。昭和16年だから、戦争の年だね。戦争が16年12月ですから、それより半年前だ。

その報告内容ですが、全部で19編あって、社会経済関係が17編、数学関係が2編となっている。依然として数学は少ない。ほとんど社会経済が中心ですね。

そのときの特徴は、国民所得研究小委員会というのが設けられた。前の年から設けられて、それの研究を2～3年かかってやったと思うが、報告をすることになって、第11回で7編報告がありました。これは学術振興会から補助を受けて、とにかく日本の国民所得をもう少しはっきりしなきゃならぬというので、小委員会を設けてやったんです。いまは国民所得なんていうと、みんな知っているようだけれども、その当時、みんなあまり関心がなかったんです。ちょうど16年だから、ケインズが13年から14年にかけてケインズ理論を発表した。国民所得というのは非常に重要だということがあって、そこで国民所得の委員会を設けて少し研究しようという話になって、小委員会が設けられて、昭和16年にそれの発表があった。

これは中心が森田優三さんだったから、森田さんの方から相当話があったと思うが、宗藤、田村、汐見さんとか、そんなような先生が委員で研究をして、学術振興会から補助を幾らかもらって、統計学会で2～3年継続事業でやったわけです。

もう1つ、この昭和16年の第11回の会議で、2つの点が問題になりました。それは、統計学辞典を作成すること。もう1つは、統計学論文集を作成する。この2つが

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

提案された。結局、2つともダメなんだ。出版社も決まっておったけれども、戦争になって、企画だけで、実際にはこれは行われなかった。

ただし、そのときに辞典をつくるについては、統計学用語の統一をやろうという話があった。それについて、用語検討小委員会というのができて、それはやった人もあるんです。統計学会としてではなくて、ばらばらに、その当時は専門学校が主体で、大学、専門学校の機関誌にそれが載っておるのもあります。調べてみれば、わかるわけだ。

砂田　何か猪間（驥一）先生が……。

山田　猪間君が、大体その中心です。あなたは猪間君に中央で教わったんでしょう。あの人が一番熱心にやって――そうだ、あの人が大体1人でやっていたな、好きなんだ。それが、昭和16年、戦争直前の統計学会で決定された。

家本（秀太郎）君の記録がここにあります。僕も、ちょっと書いたのがある。寺尾（琢磨）さんが大体中心で、そのときの書類を、寺尾さんが僕のところに全部渡しちゃって、整理しておけという話だった。これ（当時の出欠のはがき）を見ると、いろんな人がいるよ。

大内兵衛さんなんて、ちゃんとあるんだよ。島田孝一さんて、早稲田の交通法の先生とか、左右田（武夫）、椎名幾三郎、大阪商大で保険を専攻していた。時子山常三郎、岡崎文規、青山秀夫、早川三代治さんたち、早く亡くなった。赤松要、松田（泰二郎）、荒又（操）、青盛和雄さん、「拙稿別刷を左記宛御送附願上候」（記録を見て）。

砂田　「候文」ですね。（笑）

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

山田　高岡熊雄さんは統計学会ですね。

砂田　札幌、北大ですね。

山田　東畑精一さん、瀧谷善一さんは神戸、竹中龍雄、暉峻義等――いまの早稲田の暉峻氏のオヤジさんだ。田杉競、田崎慎治、酒井正三郎、馬場誠、伊大知良太郎の諸氏、井藤半弥さんは亡くなった。福田勇……。

これを見ているとおもしろいけれども、そんなのいっていたら切りがない。いろんないまは亡くなったお方が多い。

砂田　はがきが幾らのときですか、1銭5厘？

山田　2銭だ。戦争直前だから上げたんだ。その当時、いろんなことを書いてよこすんだよ。いまはあまり書かないだろう。

砂田　これは貴重な資料ですね。

山田　これをもとにして、また博士論文を書く人がいるんだよ。(笑)

僕は、このときは日本にいなかったけれども、昭和19年が最後になったと思う。これが「大日本統計協会雑誌」に載っています。大日本統計協会も、森田さんが非常に関係が深かったんです。そこに「日本統計学会臨時総会(森田優三氏報)」というのがあって、日本統計学会の本年度の年次総会(第14回)が、昭和19年の7月14、15の2日間、東北帝大の法文学部で行われた。その報告の要旨が、ここに書いてあるんです。(資料7)一般研究の部が6つ、共同研究の部が5つ、11編あるんです。数理統計は全部なくなっている。水谷(一雄)さんが数理統計らしいことをちょっとやっているけれども、そんな関係で、社会経済統計だけだといってもいいでしょう。この

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ときの出席者が25人ですね。宮沢光一君もそこへ出ている。その前に会員になったと思う。安井琢磨氏もそこへ顔を出している。彼もちょっと前に会員になったんですね。佐藤良一郎さんは、もうここにいらっしゃるし、その当時の事情がわかる。これが、戦争前、最後になったはずだ。もうやめちゃうんだ。

戦後になるのは、資料が僕のところに全然置いてない。要点だけを、僕はいま思い出してみたんですが、一応それをちょっと話してみます。

昭和24年だと思う。23年か24年に、前の日本統計学会の理事会を開いて、昭和24年に戦後第1回の学会を開こうということが、その理事会で話し合われた。そのときはだれが出たかというと、森田さんが大体中心で、中山伊知郎、杉本栄一、有沢広巳さんたちとか、汐見さんの意見も聞いたんだろうと思う。そんなことで、戦後、統計学会を継続したいということになって、その第1回を一橋大学で開くということになった。それは、「山田、全部やれ」ということで、僕は全部引き受けちゃったんだ。中山さん、杉本さんはアドバイザーで、何もいわない。もちろん意見は聞くけれども、僕が印刷から全部やったんです。戦争直後だから、何にもうまくできなかった。はがきで案内を出して、そういうことをやったんです。

第1回の会合は、昭和24年だったと思う。この点は、実は学術会議へ行って資料を調べれば、ある程度わかるんです。統計学会に関する記録があるはずなんですが、戦後第1回が24年であるか、25年に一橋で開いたかどうかチェックしないと、いまのところ何ともいえないな。

その点になると、森田さんは、はっきりしないところ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

なんだ。僕がちょっと前に読んだときでは、少し違うなという気がした。(森田優三著『統計遍歴私記』) そのときのことは書いてありますが、実際は僕のところでやった。それまでは横浜高商に森田さんがいて、森田さんが統計学会の運営をずっとやっていたんです。戦後はそれが崩れて、一橋でやれということだったから、中山、杉本両先生を顧問にして、僕が企画から全部やったという話になった。その記録が欲しいんだけれども、どうしても見当たらない。

砂田　『統計遍歴私記』にも、「日本統計学会の再建」ということで載っているんですが。

山田　それは、もう一遍読み合わせなきゃわからない。

統計学会の幹事というか事務を決定して、関東地域は山田がやれ、関西地域は家本(秀太郎)やれということで、家本が関西の取りまとめ役に回ったわけです。そういうことで、そこで森田さんの手から離れちゃったわけですね。だから、その間のことは森田さんの記録にもないし、学術会議でそういうことが出たことが書いてあったかどうか、まだ十分調べてない。

そういうことで、第1回を一橋大学で開く。第2回は東京大学で開く。そのとき、一橋で開いたときは、中山先生が学長だった。じゃ、引き受けてやろうというので、統計学会を開いた。

第2回が昭和26年だと思う。これは学術会議の記録を見ないと、ちょっと何ともいえぬが、それは東京大学で開いた。そのときの経済学部長が大内兵衛さんです。その当時、記憶にあるのは、東大も始まって間がないものだから、会場が学部長室なんだ。会議が始まったんだけ

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

れども、黒板も何もないんだ。そうしたら、黒板を持ってこいというわけで、有沢さんともう1人、2人ぐらいで持ってきた。(笑)

東大でだれがやっておったかというと、その当時、だれもやってないんだ。東大はそういうやつが多いんだ。

砂田　内藤勝(まさる)さんがいたでしょう。

山田　内藤さんは、後から入った。

砂田　中川(友長)先生はどうだったですか。

山田　関係ない。中央(大学)へ行っちゃった。だから、有沢さんがいて、大内さんが学部長だったと思う。東京大学の学部長室には、歴代の学部長の写真がずっと並べてあった。それが印象にあります。

砂田　そんなりっぱなところでやるなんて、まずないでしょうね。

山田　準備してないんだよ。それで有沢さんがもう1人だれかと一緒に、黒板かついできた。

砂田　そのときになって、実際に始まったわけですね。

山田　有沢先生、偉いことやるなと思って、僕は見たことがあるんですよ。そういう意味では、有沢さんは非常に民主的なんだ。学生を使ったかもしれないが、自分も手伝ってやる。そういう人なんだな。大内さんは泰然として大地主の息子みたいで何もやらない。じっとしている。有沢さんを使っているわけだ。それで人となりがわかる。大内さんは貴族的で、有沢さんは非常に庶民的だと思った。

砂田　だから、いまも庶民的に、有沢先生は何でもよくやっていますね。

山田　それで非常に愛想がいい。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それが東京大学の大会ですね。

砂田　数少ない、本当に内輪でやるような感じですね。

山田　それは記録が僕のところでとってなければ、ほかにはないと思うな、あの当時。

砂田　それはどんなことがあったのか、後でひとつ調べてみましょう。

山田　森田さんのところにもそれがあるかどうか、ちょっと疑問なんだ。森田さんは実際には僕の方に任しちゃった。東大でやるときも、企画立案は大体僕のところでやった。そして有沢さんのところでやるというんだから、大会の明細は東京大学でやりなさい、案内とか何かはこちらでやりますという話で、分業でやったわけです。

砂田　いまでは考えられないですね。

山田　学会といっても、ほかの学会はまだ始まってないから、社会経済関係では、理論経済は計量経済と同時です。理論経済学会も計量経済学会も全部僕が入って、統計学会と3つやらされたんだよ。よその大学は一橋でやれ、すると、中山さんと杉本さんが引き受けてくるわけです。そうしたら、「山田やれ」と僕のところにきちゃう。3つ同時にやらされた。そういう状態だった。

計量と理論の資料は、家にたくさんあるんだ。いまの経済学会はやらないものだから、ほとんど僕のところにしかない。統計学会のは、僕のところにないんだ。

砂田　ここが、空白のところですね。

山田　森田さんのところでも、はっきりしない。当然なんだ。森田さんは実際にやってなかったから。

砂田　先生のここのところは、貴重ですね。

山田　ほかの人じゃ、全然わからない。

25字×26行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

砂田　先生が1人になってやられた。

山田　杉本さん、中山さんは2人とも亡くなったでしょう。家本君がある程度知っておったと思うが、これもいなくなった。あとは伊大知君が、もう台湾からこちらへ来ていたはずだが、伊大知君はやりたくないというんだ。

砂田　どなたがお呼びになったんですか。

山田　伊大知君は、台北高商を戦争でやめて、戦後こちらへ来ました。どこへ行くかということで困った。森田さんが兄貴分なんです。藤本幸太郎先生という大先生の弟子が、森田、伊大知。伊大知君は森田さんの弟分なので、森田さんのところへ相談に行った。森田さんが、それじゃ統計局におれといわれて、統計局へ入った。それから学界へ来たいという希望があって、井上鎧三さんがやっていたかな、横浜高商へ入れということで、横浜へ行ったんです。横浜にいるときに、統計研究会だの何だのと、僕が引きずり出してやっていた。その当時のことは、伊大知君と僕しか知らないだろう。森田さんは知っているけれども、ほかには台北時代から知っているのがいるだけで。だいぶたってから、研究所をつくるときに、入らないかというので入った。その関係で、伊大知君との関係がある。

この機会に、もう1ついっておきますと、昭和25年だと思うが、それも記憶がはっきりしないが、日本統計学会が日本学術会議第7部に所属することが決定された。統計は、その当時、社会経済統計ということが中心になっておったけれども、そうでない。統計学はもっと医学にもあるし、生物学にも何でもある。したがって、第6部会（医学）まで決まっておったけれども、統計学はい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ずれにも入らないというので、第7部、独立の部会になった。これは、やはり学術会議の記録にあるはずです。それが昭和25年だったか何かで、そのときの評議員は、森田優三さん、そして初め僕がなっていたんじゃないかと思う。僕は3つやっていたわけだ。日本経済学会の評議員、計量経済学会、統計学会がもう1つあって、それは評議員としては森田優三氏だった。

これで、僕のお話は終わりなんです。資料に基づいてやると、これだけしかない。

砂田　いまの統計数理研究所のそもそもの始まりは、どうなっているんですか。

山田　あれは、昭和19年に、統計数理研究所を文部省直属でつくることが決まったんです。

砂田　それは、何か母体があって……。

山田　母体はあったんでしょう。それを運動したのがだれかというと、山内二郎さんとか、北川君とか、末綱(恕一)さんまで関係したか、それはわからないですが、とにかく政府を動かして、統計数理研究所を昭和19年に文部省につくることが決定した。そのときに松下(嘉米男)君とか林(知己夫)君とか、いまでも……。

砂田　青山さんとかはいかがでしたか。

山田　青山(博次郎)君は、そのときいたかな？　石田(正次)君はわりに古いんだ。

砂田　西平(重喜)さんはその後ですか。

山田　後です。このような人たちが、統計数理研究所をつくった。したがって、統計学会とは別になっている。ところが、統計数理研究所の定款の中に、事業活動の1

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

つとして、日本統計学会で研究発表することというのがたしかあった。そこで、彼らは、そのほかにいろいろ研究機関があるかもしれないが、日本統計学会が非常に関係が強いというので、戦後は全部、日本統計学会と数物学会（数学物理学会）で報告するということだった。

いまから思うと、数物学会はわりに厳格なんだ。統計をやっている人たちは、わりに頭がかたいんだ。（笑）いまでも変わったと思えないが、確率論をやっているのは大したものだが、戦前は、東大の数学では統計をやる人が少なかった。

ところが、そのときに北川君とか増山君、これは確率論を中心にやっていて、本格的な数学をやったわけだ。それで、だんだん日本の数学界も、やっぱり統計数学というのは重要だということになってきたわけです。そういう関係が、戦前と戦後では大いに違っていましたね。

砂田　そうすると、やっぱりいまいった先生方とか、増山（元三郎）先生とか、そういう方たちが、確率論を中心に統計学を大きく発展させたのですね。

山田　戦争前に、4人で統計数理研究会というのを開いたことがあります。それは戦前から、少数標本論とか、1926年にカール・ピアソンが出して、これがこれから先の統計学であるということをいって、戦前に本が1～2冊出ていました。昭和15年から16年にかけて、それじゃひとつこれを研究しようということで、統計数理研究会を4人でつくった。一橋からは僕が入るということで、あとは北川、増山、河田龍夫、もう1人鉄道省の保険関係で松本浩太郎。それで研究会を毎月やっていた。それも戦争になって、とうとうやめてしまいました。そのと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

きに、たとえば増山君の「少数例のまとめ方」などは、そういうところでいろいろ考えた問題です。北川君の「統計学の認識」という問題も、そんなところから始まったと思われるんです。

そこで、終戦後、統計学会の事務を一橋大学の僕のところでやっていたわけだ。ところが、森田さんが統計局長になってから、事務は統計局でやりましょうといわれた。僕は、もう嫌だといったんですよ。そこで、あそこに績幸子女史という方がいた。

砂田　いま、慶応の産業研究所にいられますね。

山田　森田さんが、あそこで1室を設けて、普通だったらできなかったんだけれども、森田さんが局長だったので、森田さんの部屋をつくったわけだ。そこへ績女史が入って、統計学会の仕事をする。これについても、統計局としては、陰で非常に反対があったが、とにかくずっとやってきました。

ところが、やっぱりいろいろやっていくと、統計局では問題があるという話になったときに、統計数理研究所が、じゃ、私の方でやりましょう、私の方はこれが本当の仕事ですからというので、事務局が向こうへ行きました。

砂田　その前に、財団法人 統計研究会の方にあったんではないでしょうか。

山田　統計研究会が一時やっていたかなァ。

砂田　そんなことを、私は記憶しています。

山田　そうすると、一橋の僕のところで、3つの学会を一遍にやっていて、できないということをいって、統計学会だけは統計研究会へ持っていく。これは中山さんが

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

理事長で、僕が理事だから、そう決定した時期がありました。それで森田さんが統計局長になって、じゃ、私のところでやります、というので、向こうへ行ったんです。

砂田　それで、東北大学の大会があって、東北大学へ行ったとき、米沢（文治）先生にお話を聞いていました。

山田　一橋でやって、仕事をやり切れないということで、統計研究会へ持っていった。統計局がその次に、自分のところの本務であるからというので、持っていきました。ところが、しばらくたってから、統計数理研究所が、われわれの事業の一環としてやるという話で、向こうへ移しました。そういう関係ですね。

そのときに、日本経済学会、日本計量経済学会、3つ持っていたんです。僕がやっているうちに1本にしようという話があって、日本計量経済学会の仕事のお世話を統計研究会が見るというので、その後、いまだにそれをやっている。そんなところです。

砂田　そういう長い間のご苦労の中から、今後の統計学会の進むべき道、抱負、希望、そんなところもちょっとお述べ願えませんでしょうか。

山田　統計学会が発展するためには、数理統計だけでは困ります。やっぱり社会統計とか、人口の問題も含んで、もっと幅広いものにしなきゃならぬ。それは、事実そうなっています。けれども、研究報告が数学に偏っています。社会経済の方は、報告しろといったってなかなか出してこない。最近になって少し多くなったけれども、前には社会経済はほとんどやらなかった。その時代に、僕が統計学会の会長をやっていて、砂田君、江見君、松田

25字×20行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

君あたりにもやってくれということで……。なぜこうなったかというのは、ちょっと記録には載せられないな。(笑)

将来の展望としては、もう少し社会、経済関係の連中にも興味のあるテーマを選んで、そして共同研究の形で共同報告をするということに、どんどんしていけば、もう少し興味が出てくる。たとえば、慶応の辻村君には、「君なんか、あそこに入って積極的にやってくれよ」といつもいっているんだけれども、要するに魅力がない。

だから、安井琢磨君が、昭和16年の大阪大での統計学会に、会員になって初めて出てきた。1時間も聞かないうちに、もう出ようというんだ。「こんなつまらぬものは学会でない」「そういえばそうだな、人のちょうちんばかり持って」と思った。

また、計量経済学会は、非常に厳重だということで有名になっちゃった。それは僕とか安井君とかが、いいかげんなことをされちゃ困ると強くいった。したがって、発表したらレジュメを必ず出すという形式を整えたわけだ。ところが、統計学会はそういうことをやってないじゃないか。

砂田　現在はやっています。

山田　彼は、こんな報告は、時間を損するだけだといって、全然出てこない。

この原因は、統計学会の目的の1つが懇親会であるということ。懇親会に重点を置き過ぎたためにそうなった。研究報告会も、もちろんやっていたよ。けれども、懇親会も同時にやったということで、全部合わせて学会だということだった。ところが、懇親会だけに興味を持って、

25行×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

26030

懇親会だけに出てくる会員がいて、報告も何もしないというのがやっぱりぽつぽつありました。戦後、学会をつくるときに、そういうのはもうよそうじゃないかということで、理論経済学会、計量経済学会の懇親会をずっとやめたことがある。いまもやめている。やっても、古い人ばかり出ていて、若い連中はあんなことやったってしようがないという。これもちょっと極端で、やっぱり学会というのは親睦会、懇親会もあるから、それもやらなきゃいけないが、それば"かりでは学会といえない。懇親が中心では学会にならないという批判があって、日本経済学会、計量経済学会は懇親会をやらないということで、いままでずっと来た。

砂田　統計学会はそもそもの事業として懇親会をやることにして、前から継続しているんですから。

山田　それから、戦後の統計学会の約款をつくるときに、懇親会も入れました。

砂田　戦前は入っていましたね。

山田　戦後、どうしたらいいかというので、中山さんは学長（一橋大学）だからほとんど"関係しなかったが、杉本（栄一）さんと僕とで立案したときに、「総会、研究報告会並びに懇親会」としました。それがいまでもずっと来ているわけです。そういう関係ですが、その辺の事情をほかの連中は全然知らないだろうな。僕が死んだらそれきりだ。資料がないんだから。

砂田　これは大事なことだと思います。やっぱり事業としてやっているんだということですね。立場の違う方々がいっぱい来られているんですから、研究だけ発表していましてもね。

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

山田　外国の学会だって、研究報告会の後、懇親会は必ずやる。学会というのは研究報告会だけでない。会員の親睦を図ることも重要な問題だ。それを統計学会は重視しているのです。日本計量経済学会は、懇親会を放棄しました。

砂田　その当時、いろいろありましたね。栗村（雄吉）先生にいろんなことを……。

山田　栗村君もちょっといい過ぎている。彼らと反対の立場で、僕はその中間あたりをとってやろうとしたんだけれども、とうとう森嶋と市村君が安井君と協調しました。僕は、若干ニュアンスが違うんです。しかし、栗村君とも違う。そういうことが総会で問題になって、いろんなことで京都派と意見が合わなくなったということで、僕も嫌気がさしちゃったということはあるんですが、それを青山（秀夫）君がやってくれればいいんだが、青山君は全然タッチしないんで困るんだ。

砂田　青山先生は、森嶋さんたちの先生なんですね。統計学会でも重大な……。

山田　彼は、前は熱心にやっていたんですが、戦後は全然出てこない。経済学会もほとんど出てこない。われわれから見ると、京都は青山（秀夫）君のところで何とかし、神戸は水谷（一雄）さん、家本（秀太郎）君のところでやり、一橋は大体一致しているから、それでやっていけば、こんな状態にならない。統計学会についても同じだと思う。

東北（大学）の統計学会の理事会に出て、いろいろ話をしているときに、会長問題が出た。会長をどうするか。それまでは、とにかく戦前第1回が高野岩三郎、第2回

25字×23行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

が藤本幸太郎、大内兵衛、中山、有沢さんとなっている。ところが、数学の方が、社会経済ばかりじゃないか、けしからぬと、評議員会でいい出した。そのときに、最も強く主張したのが水野坦君だ。水野君のいうこともある程度理解できたんだけれども……。その席に中山さんが出ていて、それでは、今後こういうふうに決めようという提案をしたんです。それは社会経済と数学が交互に会長を引き受ける。それを米沢君のやった東北大学の大会で決定した。

砂田　あのときに、緊迫感があって、われわれもそれをひしひしと感じていました。

山田　それ以来、まず社会経済がやっているから、数学の方をやろうというので、その後は交互にやることになった。佐藤良一郎さんが最初になった。これについて、人口関係をどうしてくれるのかとか、もう1つ、社会統計研究会という京都の蜷川虎三さんたちからもそういう話が出てきました。

砂田　蜷川先生の岩波から出ている本に、『大量観察法』というのがありますね。

山田　彼はまだ助手時代にいい研究をやっていましたが、やっぱり数学が上手でない人だから、戦後、統計学から方向転換しました。前には、いわゆる社会統計学派というのがあった。これは数理統計をやっている人たちはあまり知らないが、戦前の非常に重要な問題で、統計学は社会科学か、あるいはそうでないかという論争がありました。昭和12～13年ごろだったと思います。その当時、統計方法論学派、もう1つは社会統計学派、2つに分かれるんです。方法論争といって、そのときは蜷川虎三氏

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

が活躍しました。

それについて、われわれ一橋大学（当時東京商大）、神戸、京都でも青山さんたちは、統計学はそういうものじゃない，いわゆる方法論である。方法論だから、自然科学にも適用できるし、経済学にも、医学にも、何でも適用できる。それが統計学であって、統計学の発達の歴史を見るとそうなっているという。

ところが、蜷川虎三氏は、そのようなものは統計学ではない、社会大量観察をするのが統計学であるといいました。マイヤーという代表的学者が当時いた。

オスカー・ランゲなんかは、戦前ポーランドからドイツ、イギリス、アメリカへ行って、シカゴ大学でいろいろなことをやっていた。われわれは近代経済学者だと思っていた。その後、ポーランドに帰って、大蔵大臣になって、統計学の本を書いている。それを僕も翻訳した。岩波から出ている。ただし、名前は都留重人監修となっているけれども、ほとんど内容を見ていない。内容を伊大知君と僕に見てくれというから、その内容を3日間かかって調べた。そのときにわかったんだけれども、要するにランゲは近代経済学者だと思ったら、ポーランドへ行ったら全然違っちゃっていた。社会統計学派とあまり変わりないようなことをいい出した。

砂田　オスカー・ランゲの本を僕は持っていますが、全然そんな感じを受けませんね。

山田　僕はポーランドも行ったからよく知っている。ランゲはもう亡くなっていたけれども、あそこへ行ってそういうふうに転向したというか、全然変わっちゃった。それで僕たちはがっかりしたんだが、その後の文献を見

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ると、それは一時的だということがわかった。最後は、やっぱり近代経済学が中心で考えていただろう。だから、ポーランドという国が、いま問題になっているけれども、どういう国だかそれでわかるわけだ。やっぱりマルクス・レーニンの立場で書くと、ランゲの本に初めから書いてある。それは岩波でもう絶版だが、古本で出るかもしれない。その本は、統計学というものの考え方を非常におもしろく書いている。

砂田　私も持っています。

山田　全くソ連系の考え方。ソ連では、統計学は全くダメだ。確率論は非常に進歩しているが、確率論と統計学がばらばらになっちゃった国なんだ。確率論では、スミルノフとかその他世界的に有名な学者がいるが、統計学ではだれ1人もいない。

理論がそういうように曲げられると、統計学では困るが、統計方法論派といわれたわれわれは、そういうことはあまり問題にしないんだ。イデオロギーは関係ないということをいったが、蜷川虎三氏はイデオロギー的に考えた。書いてないけれども、戦時中だから書けないこともあったな。彼はマルクス・レーニンの主義をあくまで守っているから、戦後、統計学は嫌だということになって、京都府知事ということをやり出した。蜷川氏、美濃部氏は統計学をやめて、それぞれ東京都あるいは京都府知事になったというふうにいっている人もある。

砂田　でも、やっぱりそういう政治家は、みんな統計に関係しているじゃないですか。

山田　蜷川虎三氏は、戦前、助手時代には統計学者だった。しかし、戦後は全然違う。ところが、それをまた受け

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

継いでいるのが大橋隆憲氏だ。そこで松川七郎（故）とか上杉正一郎、大橋隆憲、内海庫一郎さんという人たちが経済統計研究会をつくり、私たちにも統計学会の会長を回転してくださいという要求をしたことがある。

それともう1つ、人口統計の方はという話だった。それも会長を決めるときには、社会経済統計の方へ入れたらいいじゃないかという話を、森田優三、寺尾琢磨さんがした。

砂田　人口の方で、川上（理一）先生はどうだったんですか。

山田　川上氏は、また北川君と大論争をしたんだよ。北川君は統計数理論だった。川上理一氏は公衆衛生院だが、大標本論、いわゆるカール・ピアソン流の考え方だった。ところが、北川君はスモール・サンプリング・セオリーで、学会でうまくいかなかった。これは大阪の学会で非常に問題になって、2人が論争した。理論的に、どっちが正しいといったときに、川上氏は、カール・ピアソンの大標本論でなきゃいかぬ。これに対して北川は、「スモール・サンプリング・セオリーだ」という話になった。

われわれは、スモール・サンプリング・セオリーが正しい、川上氏のいうことはちょっと納得できない。それをやっていくと、いまの社会統計学派と理論的には結びつく。ところが、川上さんはそういうことには関係がないんだ。大橋隆憲氏あたりは、どう考えているか知らないが、大標本論だから、カール・ピアソンだ。カール・ピアソンの考え方は、また社会統計学派的な考えにも通じる。社会統計学派は、悉皆大量観察というんだから、国勢調査論、これが統計学であるといったから、そこで

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大反撃を受けた。

砂田　北川先生は、確率論を中心にしてきましたから、全然違う。

山田　社会現象について、悉皆大量観察をするものが統計学であると、蜷川虎三氏が定義したんだ。それを受けているのが大橋隆憲氏です。

砂田　そうすると、それを京都学派というんですか。

山田　京都学派だ。京都学派はやっぱり河上肇さんから出ているんですな。それをずっと受け継いでいるから、河上さんの考え方は、京都では思想的には根強く残っている。

そういうことで、日本の統計学会は、数理統計だけで来ているわけじゃない。過去いろいろ変遷して……。

砂田　始まりが、何といっても中山先生を初め社会経済学者、そういう方たちが中心になって始められてきて、発表も、やっぱりそういう点が多くて、数理の方は少なかったけれども、最近になって、まるさり逆転してきているから、僕は非常に残念だと思っているし、また、どうしても昔のようにやっていかなきゃならないんじゃないかと思うんです。

山田　もう少し親睦を強くして、会員がみんな出るようにする。数学の方の報告を見たって、つまらぬ報告がある。報告の価値がないと思うものがある。要するに重箱の隅をようじでつつくような報告が非常に多い。技術的なんだ。それは本人しかわからない。みんなは興味がない。だから、あまり聞いたことがないけれども、それは数学関係でも非常に困っているはずだ。まして社会統計、人口のあんなものは聞いていておもしろくない。と

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

同時に、社会、経済関係では、あまりいい報告がないということが、現在の問題で、今後そういう点は改良しないと、統計学会はまずもたないという気がするね。それは考えていかなきゃならない。

これは、江見君にもよくいっておいてください、江見君もそういう認識はないかもしれないから。あるかもしれないが、僕のように長らく統計学をやっていないので。

砂田　僕は先生の気持ちがわかるし、扼腕しているわけですよ。初めは評議員には興味なかったんですよ。だけど、これじゃダメだと思ったので……。

山田　1つには、慶応と一橋と神戸がもう少ししっかりしてくれたら、まだいいと思う。ところが、3者全部、統計学について無関心状態になっている。

砂田　ばらばらになっているような感じですね。

山田　たとえば置塩（信雄）君なんて、「私、出ませんよ」という。彼はマルクス経済学で、非常に国際的な活躍をしている。非常に頭のいい人です。「前は統計学会によく出て、質問していたじゃないか、出てくださいよ」といったら、笑って否定した。

辻村君にしたって、つまらないんだろうね。

砂田　前には小尾（恵一郎）先生（慶大教授）も、尾崎（巌）先生あたりも相当やっていらっしゃったんだから。

山田　慶応は慶応で、また問題があるんだろうな。

砂田　いままでの慶応、一橋は、先生がつくられた後でみんな一生懸命やっているでしょう。いまは……。

山田　僕がやっていたときには、みんな入っていた。それから僕がやめてしまったら、全然振り向かないんだ。

砂田　ですから、困っちゃうんですよ。宮川さんも遠く

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

なっています。

山田　宮川、溝口、鍋谷……。

砂田　それでは困りますよ。

山田　それは、やっぱり中心人物がいないからだよ。前には中山伊知郎、杉本栄一、僕というのがいて、がっちり構えていた。それがいなくなったら、いまばらばらだ。

砂田　江見先生が頑張っています。

山田　江見君ではちょっと貫禄がない。それで何とかしなきゃならない。だれかしっかりしたのがいればいいけれども、中心になるのがいない。僕がやっていたときもだいぶ嫌になって、「オレは統計学会をぶん投げるぞ」といったこともある。

砂田　僕はずっと報告はしています。

山田　しかし、やっぱり統計学者としてはまだ十分認められていないな。もう少し認められていかないと。そのためには研究をどんどん発表して、数多くやっている間にだんだん認められるわけだ。

統計学会というのは、戦前は、若い学者の登竜門になっていた。僕なんかもそうした。統計学会で毎回報告した。そうすると、年寄りが、「ああ、あれは研究している。それじゃうちへ引っ張ってやろうか」。そんなような話でだんだん有名になってくるし、学者として人格形成が成るということだと思う。いまはそれがないんだ。新しい者の登竜門といったって、統計学会を知らないというやつもいる。

それからいわゆる学会離れが、理論経済学についてもいわれる。若い有能なのが、学会から離れている。ただ出席はするけれども、積極的に報告しない。なぜそうな

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ったかというと、もっと小さいグループで研究会をやっているわけだ。こちらの方が、いまは非常に問題になっている。重要なんだ。統計学会とか計量学会に報告したってつまらない。お余りを報告してやるとか、そういう風潮にだんだんなってきた。本来重要な、自分のおもしろいものは、ほかの小さいグループの研究発表をやる。それがごく最近の傾向だね。一橋あたり見たって、学会で報告したってつまらぬという。それでは困るんだ。

それを魅力あるものにするためには、統計学会そのものを反省しなきゃならぬ。そのためには、統計学会のいまの連中では少し困る。やっぱり先輩も入って、新しい者も含めて、座談会をやる。そして、意見をいろいろ聞く。特に統計学会なら、僕はこんなものがあったかどうか知らぬ、僕は出なかったけれども、50周年記念の事業でなくて、それを機縁にして統計学会に関係のある人に全部集まってもらって、座談会をやることが必要でなかったかと思うんだ。そうすれば、こういう問題がずっと出てきますよ。ただ、昔の人はいまの統計数理研究所の連中とは親しみがないから、呼びかけたって、そんなの知らないというようなことで……。

砂田　私たちだって、あまり関係のない人多いんで……。

山田　たとえば昔から関係のあった人を企画の中に加えて、新しい人も加えて、交代で座談会を開くということにすれば、昔からの人が出てくると思う。いまの数研だけでやったら全然出ませんよ。

そういうことで、少なくともいままでの統計学会の会長を一遍全部集めてみる。そういう人の意見をまず聞くことが、ぜひ必要だと思う。そうなれば、統計学会のい

25字×28行

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

まの連中とはまた違った考えが出てくるわけだ。そういうのを聞いて、統計学会の将来はどうあるべきかという座談会でも、一遍やってみるんだね。

それは従来の統計学会の会長だけでは不足だから、もう少し若い人も入れて、そういう企画を立てる。有志が集まってこいといったってしようがないから、こちらの方で中心になる人はだれかということで、これは統計学会の会長がいるから、その人に現在の統計学会で活躍している人たちをプラスして座談会を開くことは、1つの問題だろう。そこで、問題を見つけていく。

砂田　いろいろと行事にしましても、1000名以上の会員が来ている大世帯になっていますけれども、社会科学の人たちから見れば、いまの学会は魅力がないんですね。どうしたらいいかという問題について、もっと方法があると私は思うんです。その突破口として、先生のおっしゃるようなことが機縁になってくればいいと思うんですね。

山田　突破口で、さしあたって一遍やってみる。それは案内を出しただけじゃダメだよ。大家ばかりだから、もう一遍電話で、ぜひご出席くださいといわなきゃ出ない。そこまでやらないと……。

砂田　それはそうですね。僕は、先生が出ないのをしつこく何回もおこられるのを覚悟で電話しました。こんな話なんてちょっと聞けないものです。

山田　この話は、いままであまりしたことないですね。そんなことできようはどうも。

砂田　ありがとうございました。

25字×28行